

所属	看護学研究科 看護学専攻 修士課程 コミュニティ看護学分野	修了年度	平成 28 年度
氏名	斉藤京子	指導教員 (主査)	山田 秀樹 (安齋 ひとみ)

論文題目	看護師が被災者である対象に手を当てて援助することへの思い -震災直後から現在まで被災者のもとへ赴く看護師へのインタビューを通じて-
------	--

本文概要	
<p>目的: 東日本大震災直後に被災した人のもとへ自ら個々に赴いた看護師が、被災者の身体に直接手を当てながら援助を行なったのはどのような思いからか、震災から 5 年を経て、現在も活動を継続する時間軸の中で看護師の思いが変化していくプロセスを明らかにする。その結果から、疲弊し心身を消耗している対象に看護師が手を当てて援助を行う際の示唆を得る。</p> <p>方法: 震災発生当初から被災者に手を当てて援助し、現在まで活動を継続する研究協力の得られた看護師 6 名に半構造化面接を実施、期間は平成 28 年 6 月～7 月。M-GTA 修正版グランデット・セオリー・アプローチを採用して分析する。</p> <p>結果: 6 名の看護師よりデータが得られた。この結果 25 概念、13 コア概念を抽出し、看護師が被災者である対象に手を当てて援助することへの思いとして 9 カテゴリー、“被災地に赴く前”【自分の五感を使って役に立つことを探す】、“被災地に行った時”【擦るしか手段が思い浮かばない】、“手を当ててみて”【手を当てることは誰にでもできる援助】【お互いに行き交う触れる思い】、“活動の途中経過の段階”【触れるときは配慮が必要】【看護師として抱いた気持】、“5 年間で振り返って”【看護している自分を自由に突き詰められた】【喜びを受け取った経験が活動を継続させた】【活動の継続がアイデンティティ】を生成した。</p> <p>考察: 看護師が手を当てることへの思いは、はじめから手を当てようと赴いたわけではなく、【自分の五感を使って役に立つことを探す】思いが中心となり援助を行っていた。現在までの活動で、看護師として自由に援助に当たり被災者の喜びを受け取ったことが看護師の喜びとして活動の継続を支えていた。このような相互の関わりのプロセスが、看護師のアイデンティティを強め継続の原動力になったと考える。</p> <p>結論: 看護師が被災者へ手を当てた思いと、5 年間の思いの変化のプロセスは、【お互いに行き交う触れる思い】【触れることは配慮が必要】の 2 つと【喜びを受け取った経験が活動を継続させた】【活動の継続アイデンティティである】の 2 つが、共に相互に関連するカテゴリーであった。この結果から被災者に限らず、看護師が対象に手を当てる援助をとおして看護を模索し、自分達の望む看護を追求することが重要であると考えられる。</p> <p>key words: 手を当てた援助、被災者へのケア、看護活動への思い</p>	